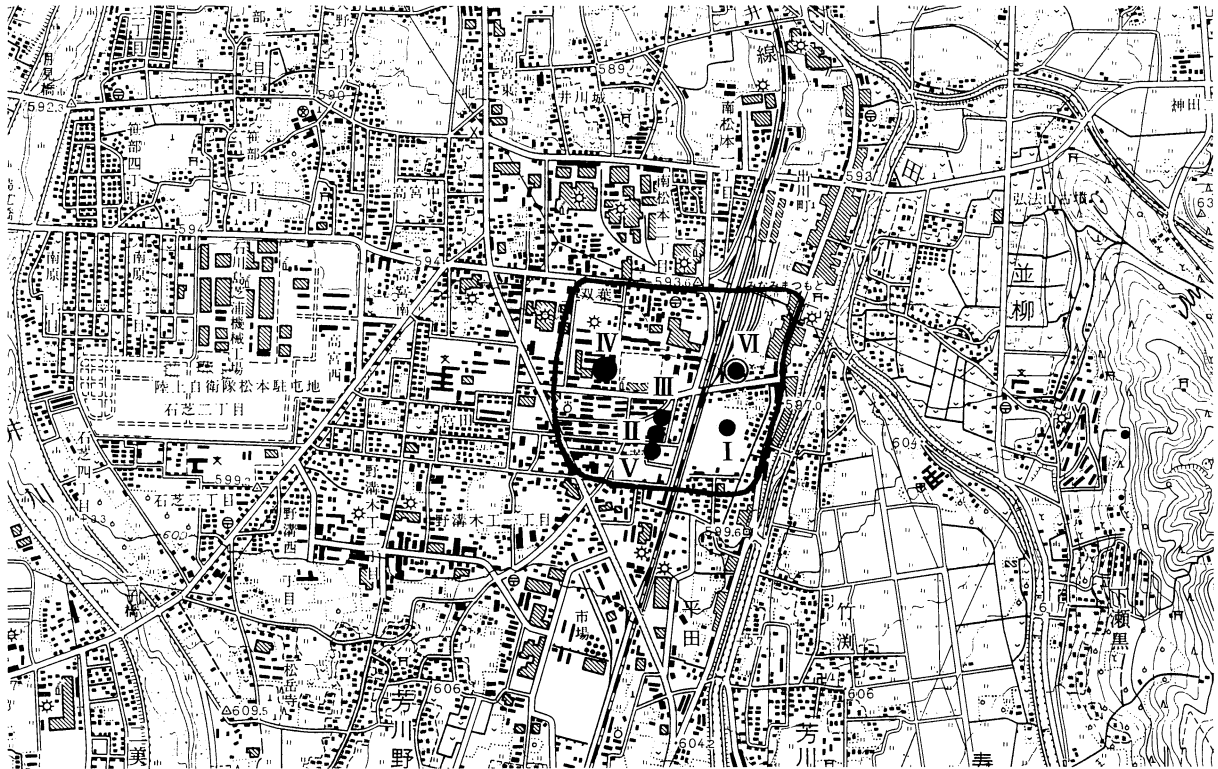


長野県松本市

IDEGAWA MINAMI

出川南遺跡Ⅵ

—緊急発掘調査報告書—



第1図 遺跡・調査位置

2000.3

松本市教育委員会

例言

- 1 本書は松本市出川町18-1他に所在する出川南遺跡の第6次発掘調査報告書である。
- 2 本調査はマンション建設事業に先立ち、大成産業株式会社と松本市が委託契約を締結し、それに基づき松本市教育委員会が実施した。
- 3 本調査の現場作業は平成10年7月16日から9月30日、整理・報告書作成作業は平成11年4月5日から12月28日にかけて行った。
- 4 本遺跡の発掘調査は昭和61年から断続的に行われており、遺構番号は先の調査の連番とした。
- 5 本書の執筆は遺物のうち石器を太田圭都、その他すべてを直井雅尚が行った。
- 6 炭化材の放射性炭素年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し実施した。結果は本文中で触れた。
- 7 本調査で出土した遺物、作成した測量図等の図面、写真類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館で収蔵している。
- 8 調査及び整理において次の方々からご教示、ご協力を得た。記して謝意を表す。
青木一男、太田守夫、神村透、桐原健、小山岳夫、竹原久子、茅野浩、山下誠一

目次

例言・目次・調査体制	2
調査の概要	3
遺構	4
遺物	11

調査体制

調査団長 舟田智理：松本市教育長（～H10.10.15）
竹淵公章：同上（H10.11.1～）

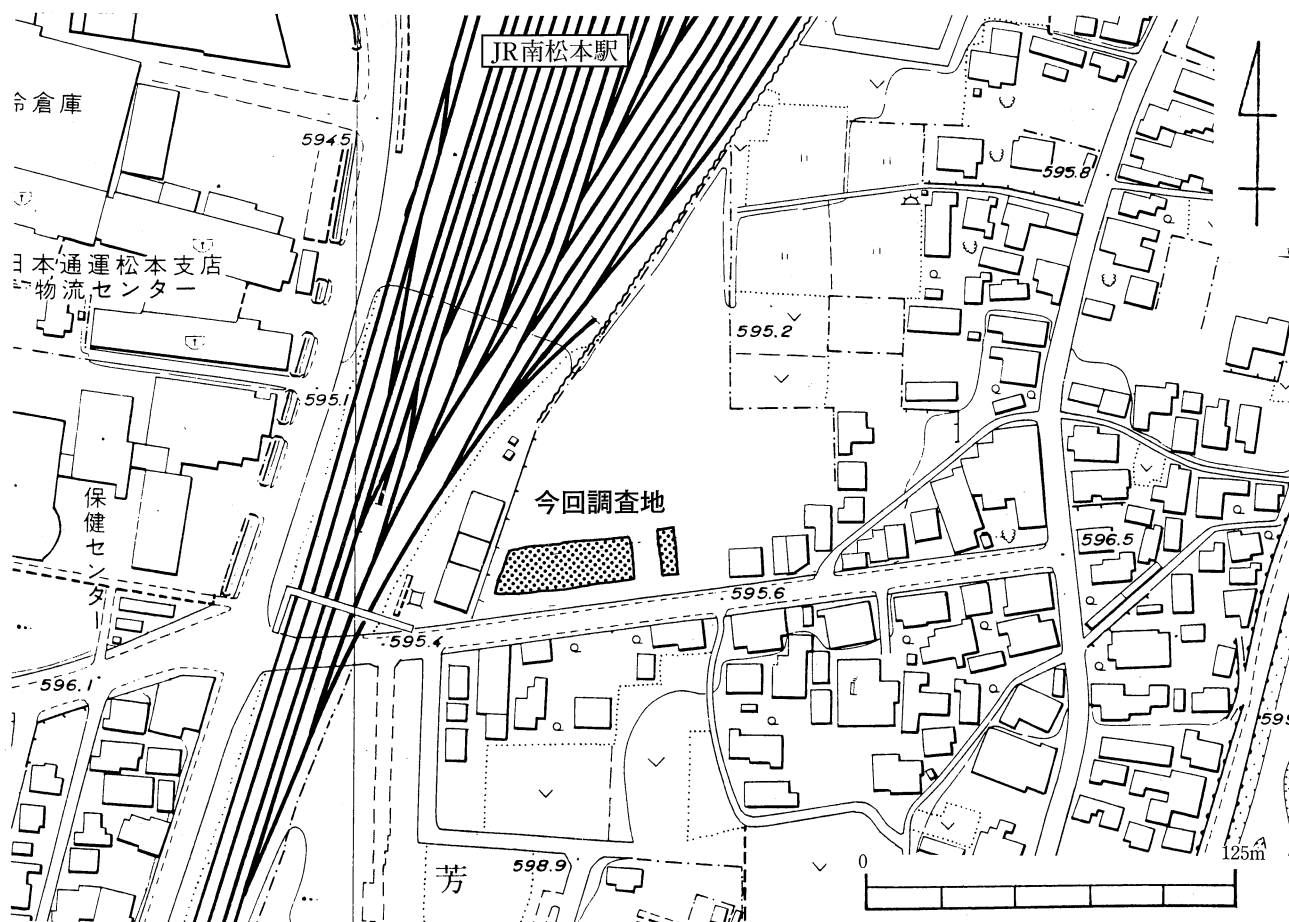
調査担当 直井雅尚、長畦和正（文化課文化財担当）

調査員 今村克、松尾明恵

協力者 青木雅志、大月八十喜、上条信彦、窪田瑞恵、河野清司、三戸智史、塩原忍、清水究、清水貴広、下里千代子、鷺見昇司、中上昇一、中崎助治、原智之、福島勝、藤本利子、真々部まさ子、丸山恵子、道浦久美子、南山久子

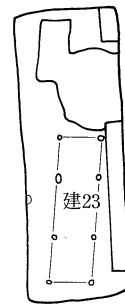
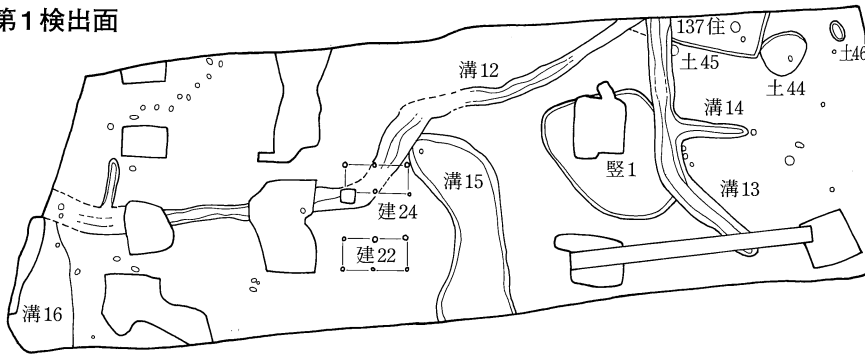
調査指導 望月映、森義直

事務局 松本市教育委員会文化課文化財担当
木下雅文（文化課長）、熊谷康治（同課長補佐）、村田正幸（同文化財担当係長：H10）、松井敬治（同課長補佐：H11）、久保田剛（同主任）、近藤潔（同主事：H10）、武井義正（同主任：H11）、酒井まゆみ（同）

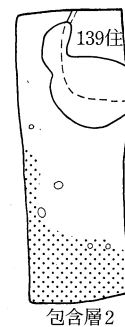
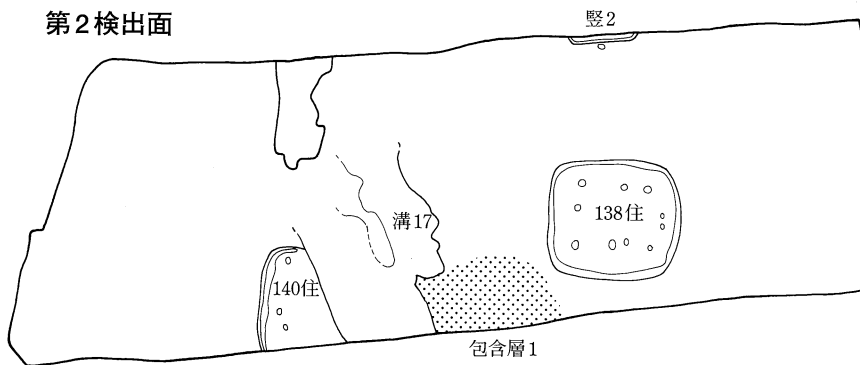


第2図 調査範囲

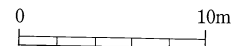
第1検出面



第2検出面



第3図 遺構配置



調査の概要

調査の経緯 出川南遺跡はJR南松本駅の南方に広がる周知の埋蔵文化財包蔵地で、過去数次の発掘調査により弥生時代後期～平安時代の集落遺跡であることが判明している。今回の発掘調査は、遺跡内に大成産業株式会社がマンション建築を計画したことに端を発する。これを受け、松本市教育委員会では当該予定地内で遺構・遺物の有無や残存状態を確認するため、試掘・確認調査を実施した。同地には既存建物があったが、平成10年3月及び7月に行った試掘では弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が検出され、当該開発に先だって埋蔵文化財の保護措置が必要となった。このため、同社と松本市は本遺跡に関する記録保存のための緊急発掘調査を実施する委託契約を平成10年7月16日付で締結し、市教委は同7月21日から発掘調査に着手した。現場作業は同9月30日に終了、引き続き、翌年には整理作業及び調査報告書刊行作業の委託契約を締結、本書の刊行をもって業務を完了した。

調査地の位置・範囲 調査地は松本市出川町18-1に位置する。JR篠ノ井線南松本駅の南方250m、県道寺村・南松本停車場線北側に接し、同線踏み切りの東にあたる。今回の開発事業以前は倉庫及び店舗として利用されていた。調査範囲はマンション1F部分の面積を対象としたが、調査地内東側に住宅への進入路を残したため、その部分の面積が減少している。この進入路部分を挟んだ東側の狭小な調査区を「東調査区」として遺物出土地点などの扱いで分離した。

調査成果の概要 調査地全面で平安後期、古墳後期、弥生後期の各遺構検出面（調査地東側でそれぞれ地表下0.9m、1.0m、1.3m）を確認したが、平安面は浅い遺構があった調査区東側のみ面的な検出を行った。古墳面（1検）と弥生面（2検）は全面検出を実施したが、調査地西側では両面が接近し、1検上で平安期の遺構確認が可能であった。

弥生時代の遺構は竪穴住居址3軒と遺物包含層の発達したもの2か所。時期はいずれも弥生時代後期前半である。古墳時代の遺構は竪穴住居址1軒、溝3条、竪穴状遺構1基で、時期はいずれも古墳時代後期に属す。平安時代は掘立柱建物址3棟と土坑1基。時期は後期と推定される。遺構・遺物等の細かいデータは巻末抄録に譲る。

本遺跡全体での傾向は、弥生時代では今回調査地の南150mの第1次調査地（昭和61年発掘・報告）で後期前半の竪穴住居址・竪穴状遺構が発見されており、遺跡の東部一帯に集落が展開することが明らかになった。古墳時代後期の遺構分布の中心はJR篠ノ井線の西側、現在のジャスコ南松本店周辺と推定されており、今回の発見は現段階での分布域の東端となる。平安時代の遺構は10世紀後半を降ると推定される。今回調査地の北50mで実施した試掘では数軒の住居址が集中して確認されており、今回調査地付近に同時期の遺構が集中する状況が推測される。

遺構

1 竪穴住居址

第137号住居址(第5図) 調査区東部北側の1検で確認。北側の3/4以上が区域外にかかる。西側部分で溝12・13に切られる。平面形は一辺7mを超える方形を呈すと推定。確認できた壁の掘り込みは東22cm、南20cmを測り、西は溝と重複して不明瞭となっている。床面は平坦だが硬さはない。住居縁辺部のためであろう。ピットは5基ありP₃が規模からみて南東隅の柱穴に該当する。P₁・P₂は東壁に近くで焼土を伴い、カマド関連の施設と推定する。出土土器からみて古墳時代後期に属すると考える。

第138号住居址(第4図) 2検の調査区東側中央部で確認。今回調査で唯一、全形がわかる住居址である。平面形は東西6.80m、南北6.28mの東辺が張る隅丸長方形を呈す。主軸線はN-88°-Wを指す。壁は35~55度の傾斜で、壁高は東20~28cm、北28~36cm、西30~34cm、南24~28cmを測る。床は地山そのまま、礫が剥き出しになったところもあり、叩き締めた感じはない。ピットは10基検出され、うちP₁~P₄・P₅(またはP₇)・P₆が6本長方形配列の支柱穴になる。P₈は炉裏の支柱穴、P₉・P₁₀は入口部施設に伴うと推定する。中央部西側奥寄りに石囲炉があり、奥壁側を除く三方を細長い石で方形に囲み、内部に大形の壺下半部片を敷いている。焼土や炭がわずかに残る。

遺物出土状況は、覆土中層から下層にかけて土器や石器が点在していた程度である。しかし、覆土下層に多量の炭化材が残り、いわゆる焼失住居の一種と捉えられる遺構であろう。炭化材は住居縁辺部に多く残り、かなり細切れになっていたが、全体としては中心部分を欠く放射形を呈す(第4図右下)。本址は弥生時代後期前半に属する。

第139号住居址(第5図) 2検の東調査区北端で確認。北部及び東部は区域外にかかり、調査区内でも撓乱によって壁の大半を破壊される。調査区壁の土層で捉えられた壁の立ち上がりりと土器埋設炉の位置から、本址の平面形や範囲を推定した。N-6°-Eに主軸をとり、軸長5m以上の胴張り隅丸長方形を呈すと考える。床面は平坦で、やや硬さを感じた。ピットは検出できなかった。炉は奥壁寄りと推定する位置に甕上半部(第8図13)を正位に埋設している。弥生時代後期前半に属する。

第140号住居址(第5図) 2検において調査区中央部の南側で確認。南部は区域外にかかり東側は溝17に破壊される。平面形は主軸をN-5°-Eにとる南北に長い隅丸長方形であったと推定する。壁高は16~24cmを測り、直下に深さ5cm、幅20~35cmの周溝が巡る。床面は平坦だが叩き締めた状況はまったく認められなかった。ピットは3基検出できたが、いずれも規模が小さい。炉址は検出できなかった。北部の床上やや浮いて壺の一括品が潰れるように遺存していた。弥生時代後期前半に属する。

2 掘立柱建物址(第6図)

1検において3棟を確認。建22・建24は調査区ほぼ中央、建23は東調査区に位置する。建22・建24はいずれも東西に長軸をとる1×2間の建物址で、建22は1.6×3.4m、建24は1.6×3.3mの平面規模を持つ。南北に並んでおり、2棟で1単位の可能性がある。建23は1×3間の建物址で、南北に長軸をとり1.1×7.7mの規模を測る。これら3棟の建物址の柱掘り方は直径30cm前後の円形で、覆土は灰色土を基調としている。平安時代後期に属すると推定する。

3 土坑(第6図)

1検及びその上層の平安面で土44~土46の3基を確認した。土44は2.4×2.1mの不整楕円で、検出時にかなり上部を削り込んでしまったため、最深でも12cmと浅い。多数の細かい炭化物を伴い、南縁部からは短刀(第12図2)が出土した。土45・土46は小形の土坑で特徴はない。覆土は土44・土46が灰色基調、土45が暗褐色基調で、前者が平安時代後期、後者は古墳時代後期に属すると推定する。

4 溝(第7図)

1検で溝12~溝16の5条、2検で溝17を検出した。ただし、人為的な遺構は溝13・14・15の3条で、他は流路である。溝13~溝16は古墳後期の土器を出土し、当該時期に存在したものであろう。溝12は覆土からみて古墳後期から平安後期の間、溝17は弥生土器片を含むことから弥生後期と古墳後期の間に生成したものであろう。

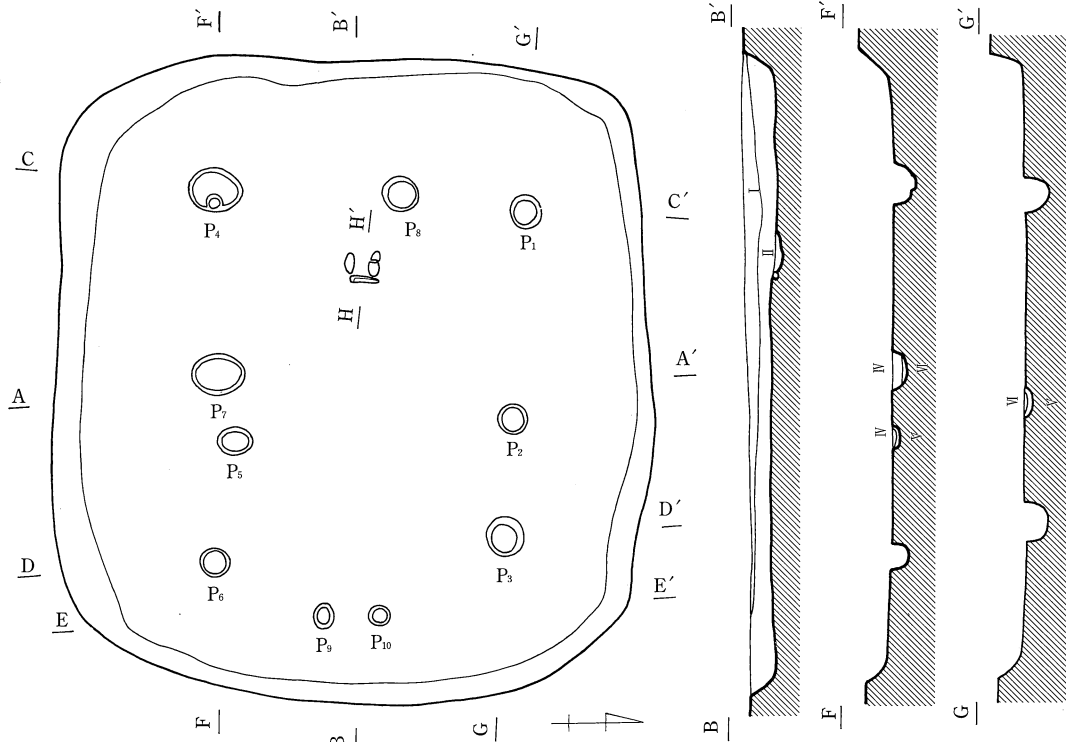
5 竪穴状遺構(第6図)

1検で竪1、2検で竪2の計2基を確認。竪1は6.4×8.2mの不整な楕円形で、東側を溝13に切られる。掘り込みは浅く、壁の傾斜は緩い。底面は細かい起伏み、南から北に向い徐々に深くなる。床やピット、炉などの施設はみられない。古墳時代後期の土師器・須恵器小片が散発的に出土した。竪2はほとんどが区域外にかかり、南端部がわずかに調査できたにすぎない。その範囲は東西3.6m、南北は0.4mである。調査区壁の土層断面でみると深さは24~48cmを測る。上層に1検遺構の137住と溝12があり、本址出土品として取上げ提示した土器の大半は137住に属する。

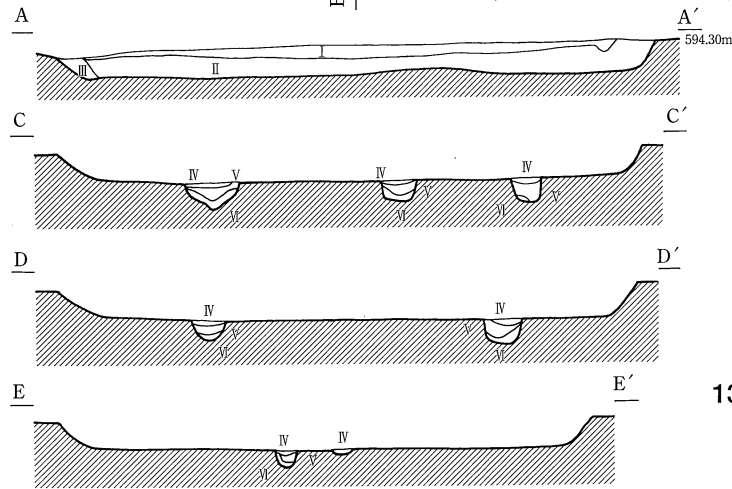
6 遺物包含層

2検の138住南西外から溝17にかけて(包含層1)と、同じく東調査区2検の南半部(包含層2)で土器を多く含む暗褐色土層が発達していた。厚さは5~10cmで、徐々に下の褐色土層に移行し、それに伴い遺物出土もなくなる状況であった。包含層2下部からは数基のピットが検出された。土器は2検の竪穴住居址と同様の弥生時代後期前半のものであるが、すべて破片で一括品はない。

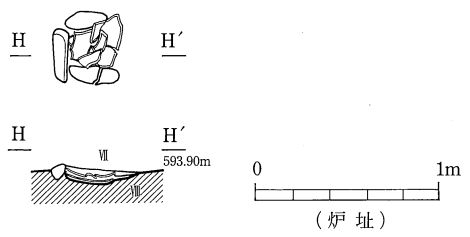
第138号住居址



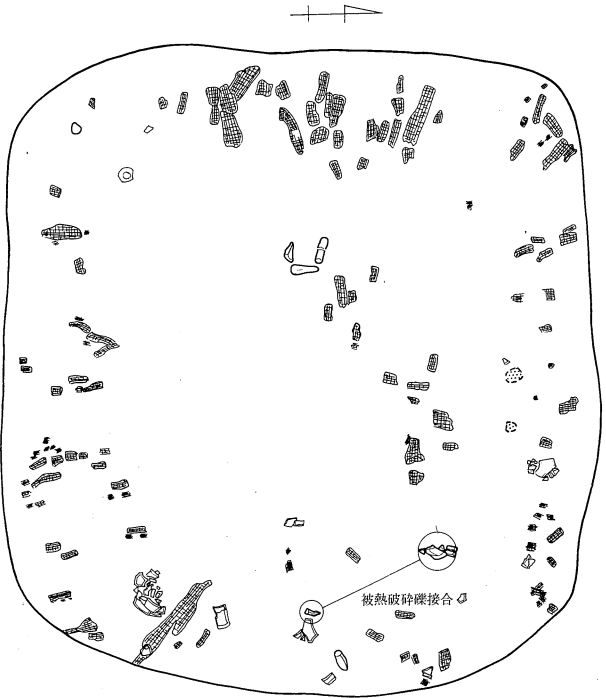
- I: 灰色シルト質土 (わずかに骨灰)
- II: 暗灰褐色シルト質土 (φ1cm大の礫混入、炭化材分布)
- III: 暗褐色砂質土 (炭化材分布)
- IV: 暗褐色シルト質土 (礫少量混入)
- V: 暗灰色砂質土 (礫多量混入)
- VI: 灰色砂質土 (砂利層)
- VII: 暗灰褐色シルト質土 (炭化物微量混入)
- VIII: 暗灰褐色シルト質土



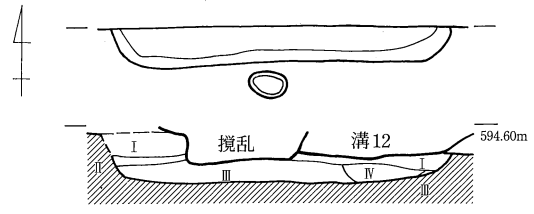
138住 炉址



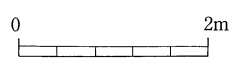
138住 遺物出土状況



第2号 竪穴状遺構

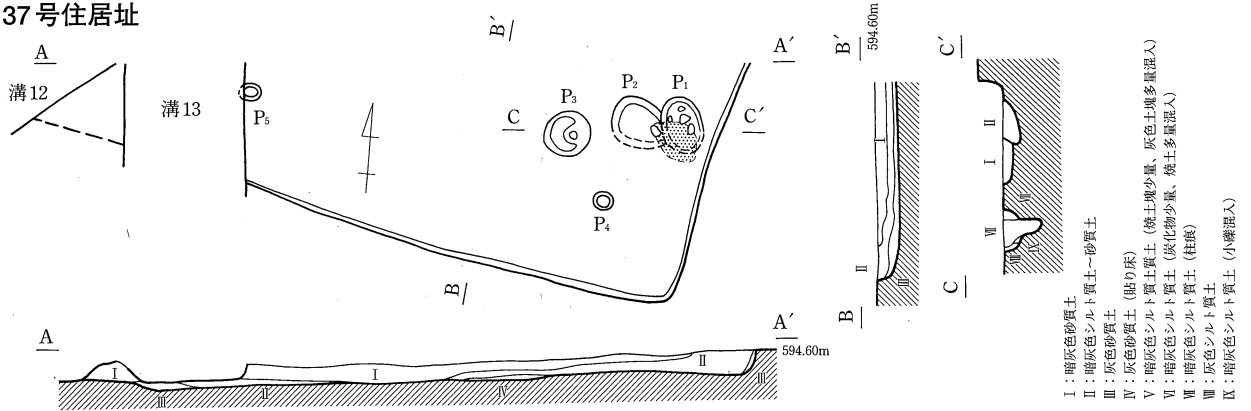


- I: 淡灰褐色シルト質土
- II: 暗灰色砂質土
- III: 暗灰色シルト質土～砂質土
- IV: 灰色砂質土

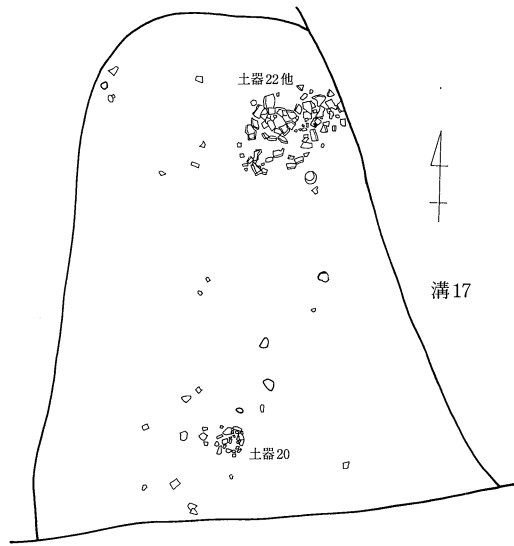


第4図 住居址 (1)

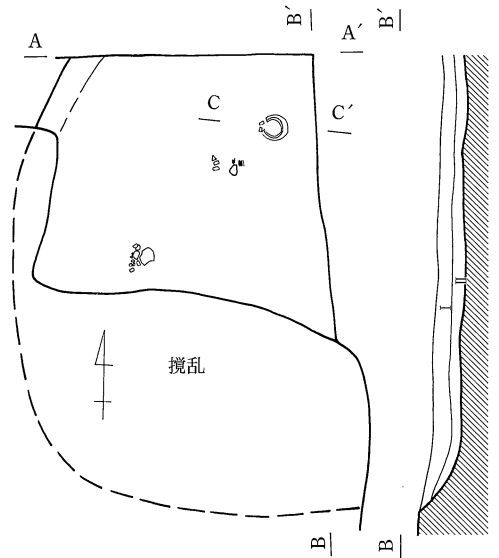
第137号住居址



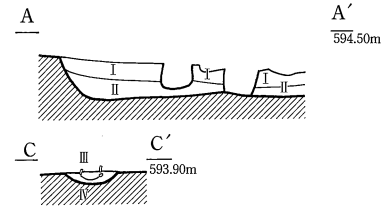
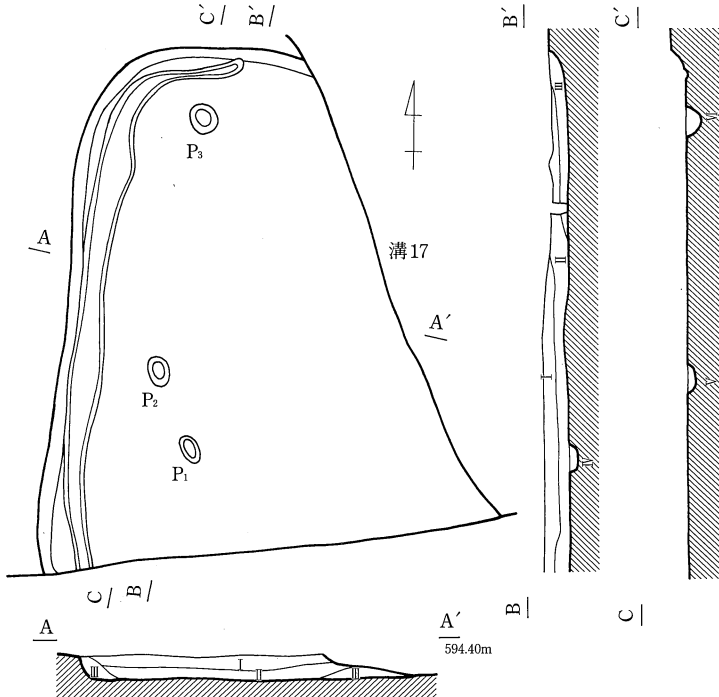
140住 遺物出土状況



第139号住居址

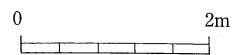


第140号住居址



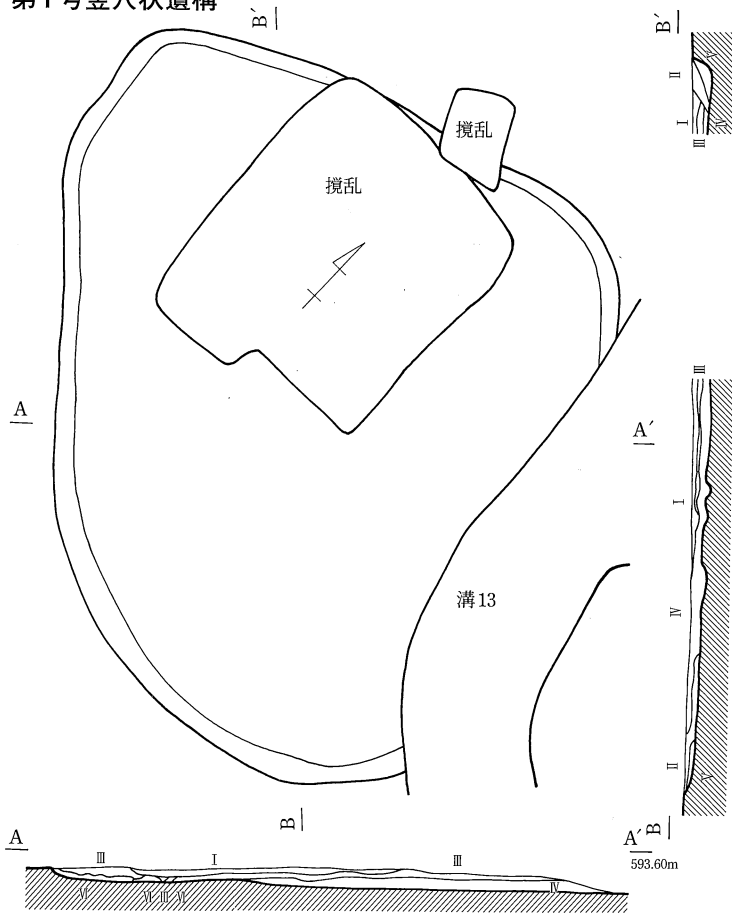
- I: 暗褐色弱粘質土 (小礫混入)
- II: 暗灰色弱粘質土 (小礫混入)
- III: 暗褐色土
- IV: 暗灰砂礫質土

- I: 灰色弱粘質土
- II: 暗褐色弱粘質土
- III: 暗灰色砂質土
- IV: 暗灰色シルト質土
- V: 暗灰色シルト質土 (IV層より薄い)
- VI: 灰色シルト質土



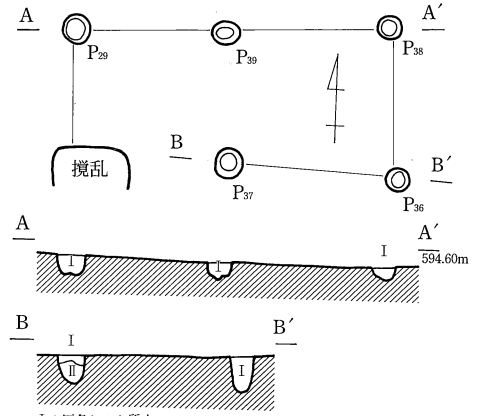
第5図 住居址 (2)

第1号竖穴状遺構



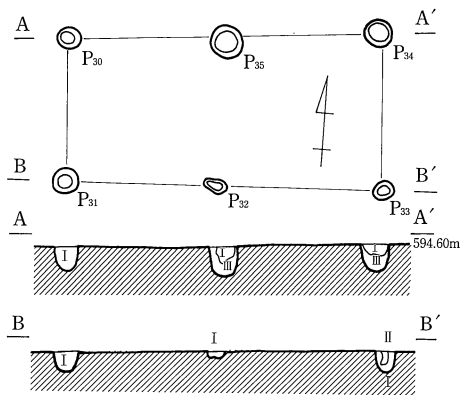
- I: 暗灰色砂質土 (粗粒混入)
- II: 暗灰色砂質土
- III: 灰色シルト質土
- IV: 灰色砂質土
- V: 灰色砂質土 (IV層よりやや暗)
- VI: 灰色シルト質土 (III層より明、粘質)

第22号建物址



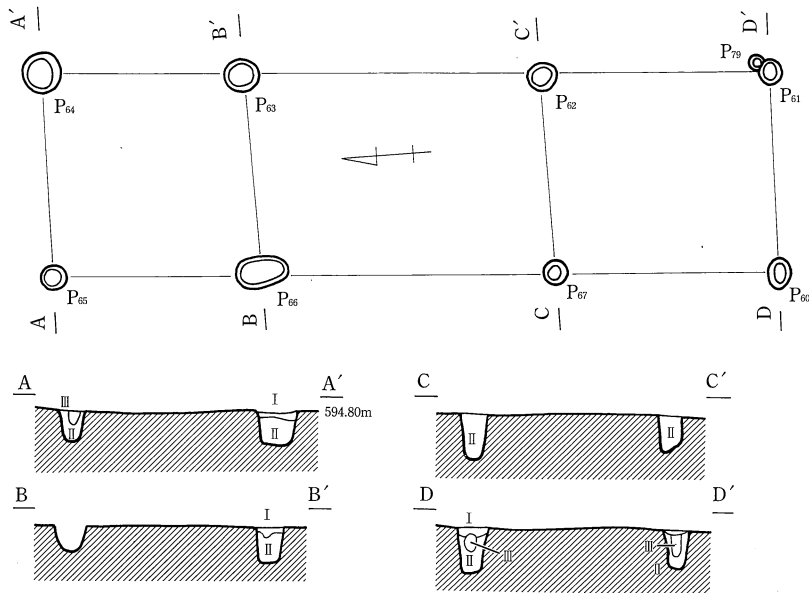
- I: 灰色シルト質土
- II: 灰色・灰褐色シルト質土が斑状に混入した土

第24号建物址

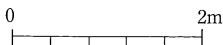


- I: 灰色シルト質土
- II: 暗褐色シルト質土
- III: 灰色・灰褐色シルト質土が斑状に混入した土

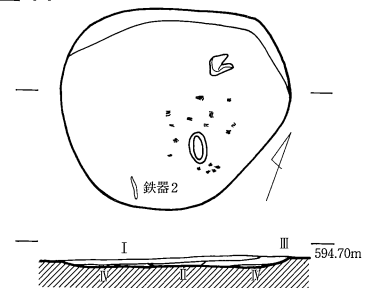
第23号建物址



- I: 灰色シルト質土
- II: 暗灰色シルト質土
- III: 灰色シルト質土 (炭化物混入、柱痕)

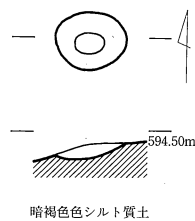


土44



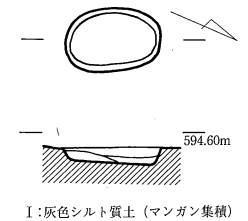
- I: 灰色シルト質土 (わずかに鉄分集積)
- II: 灰色シルト質土 (φ 0.5~1cm 大の炭化物、焼土微粒多量混入)
- III: 灰色シルト質土 (φ 0.5~1cm 大の炭化物、焼土微粒少量混入)
- IV: 暗灰色シルト質土 (鉄分・マンガン多量集積)

土45



- 暗褐色シルト質土

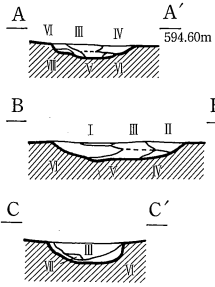
土46



- I: 灰色シルト質土 (マンガン集積)
- II: 灰色シルト質土
- III: 灰色砂質土

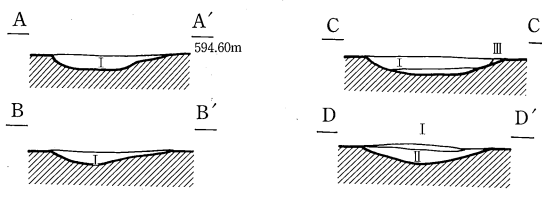
第6図 竖穴状遺構、建物址、土坑

溝12



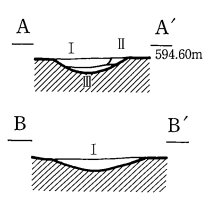
- I : 灰色シルト質土
- II : 灰色シルト質土 (微砂粒混入)
- III : 砂礫 (φ 0.1~0.5cm)
- IV : 灰色シルト質土 (微砂粒微量混入)
- V : 砂礫 (φ 0.1~0.5cm)
- VI : 灰色砂質土
- VII : 灰色砂
- VIII : 砂礫 (φ 0.1~0.5cm)

溝13



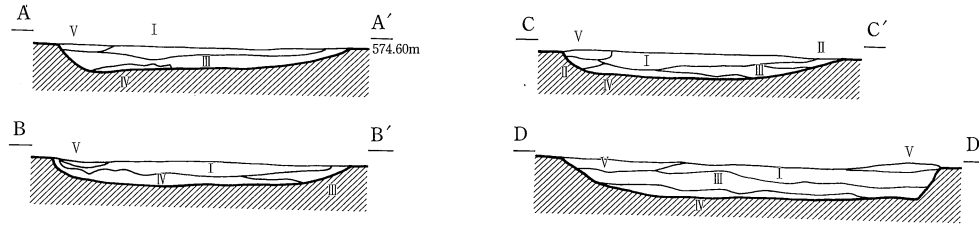
- I : 暗灰褐色シルト質土 (鉄分・マンガン集積)
- II : 暗灰褐色シルト質土 (炭化物極微量、砂混入)
- III : 暗灰褐色シルト質土 (鉄分・マンガン集積、灰褐色シルト質土塊混入)

溝14



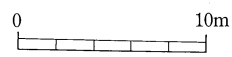
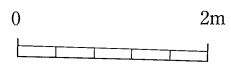
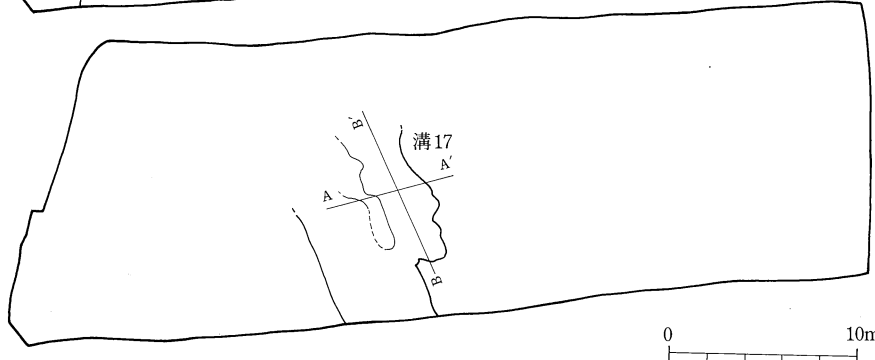
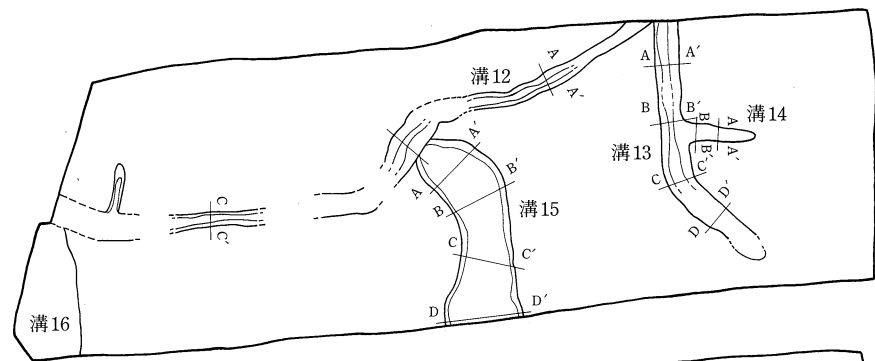
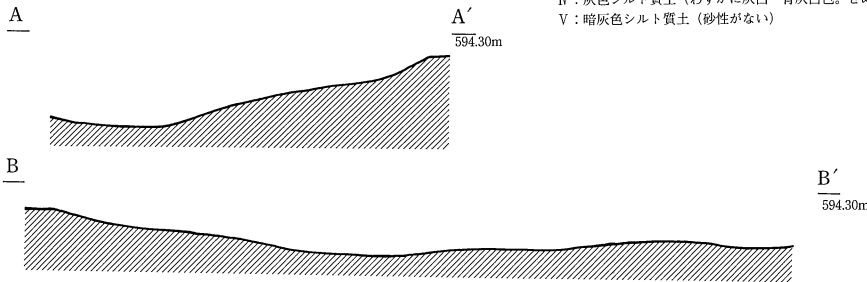
- I : 暗灰褐色シルト質土 (鉄分・マンガン集積)
- II : 暗灰褐色シルト質土 (鉄分多量集積)
- III : 暗灰褐色シルト質土 (マンガン多量集積、小礫微量混入、やや砂質)

溝15

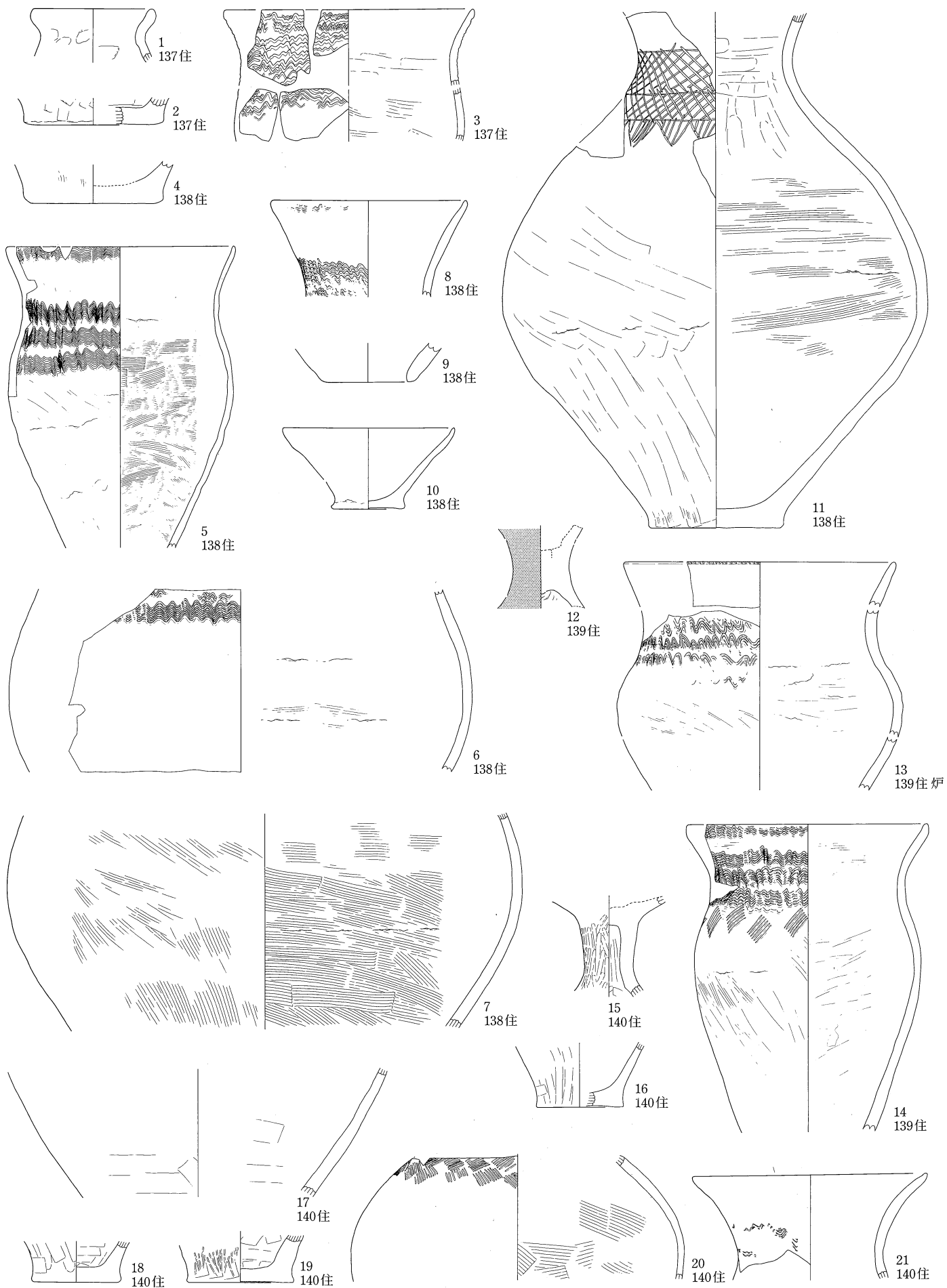


- I : 灰色砂質土 (やや粗い砂混入)
- II : 灰色シルト質土 (砂混入)
- III : 灰色砂質土 (I層より明るい。砂が細かい)
- IV : 灰色シルト質土 (わずかに灰白~青灰白色。きめが細かい)
- V : 暗灰色シルト質土 (砂性がない)

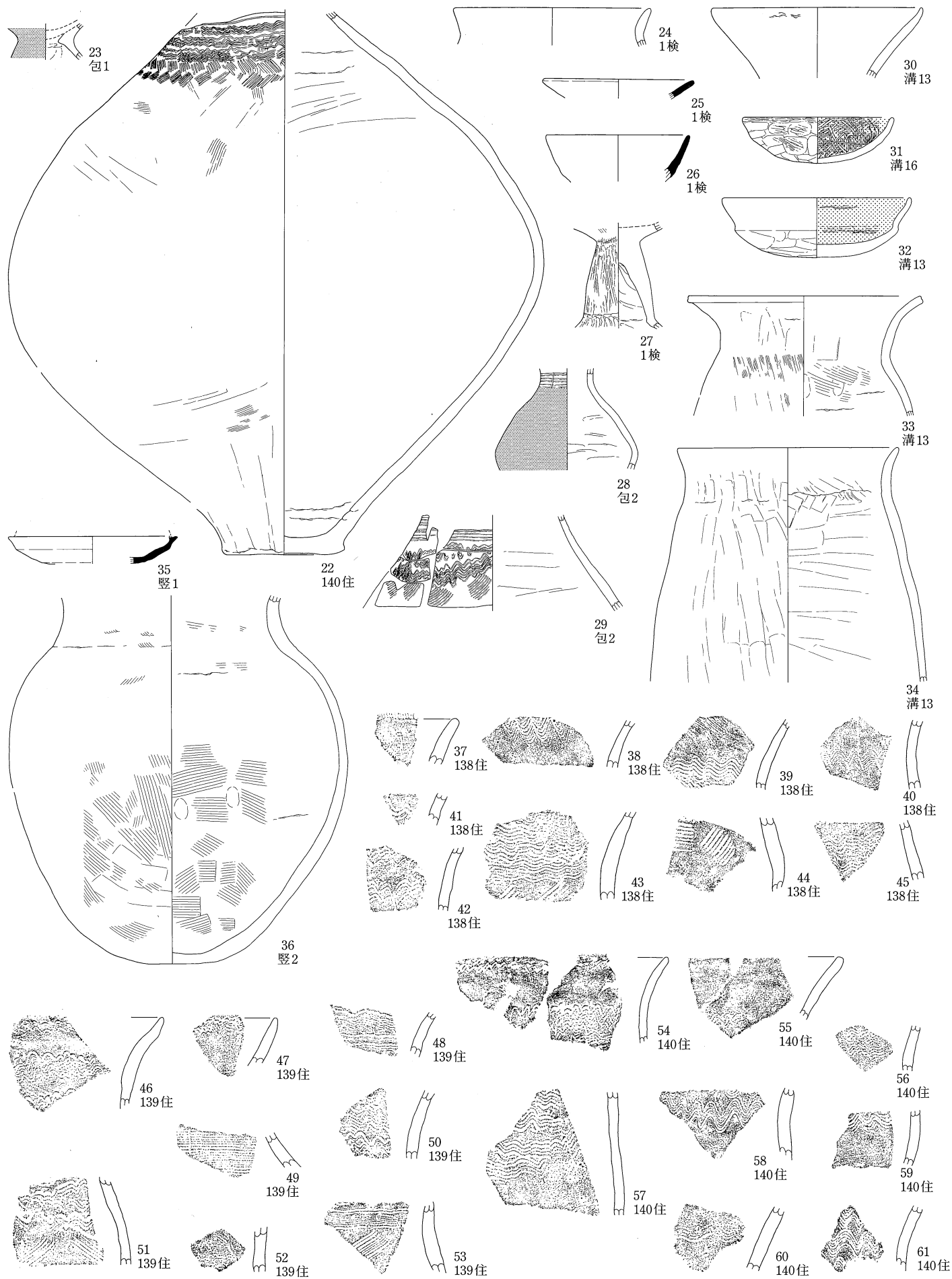
溝17



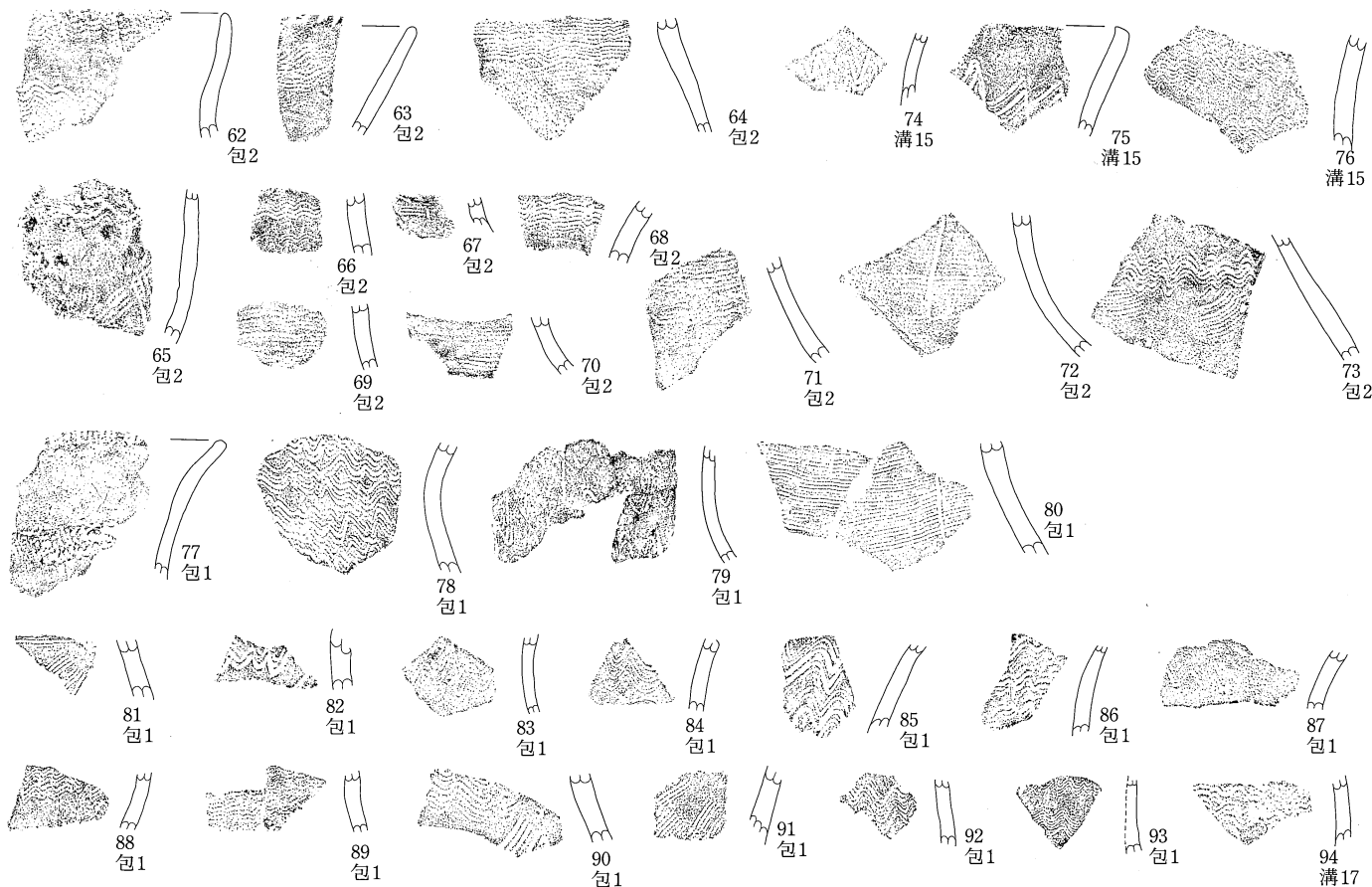
第7図 溝



第8图 土器 (1)



第9図 土器 (2)



第10図 土器 (3)

遺物

1 土器 (第8～10図)

弥生土器 今回出土土器の量的主体をなす。弥生後期の138住～140住と同期の遺物包含層、溝内、及び以降の遺構に混入して出土した。図化23点(第8・9図3～23・28～30)、拓影58点(第9・10図37～94)を提示できた。全形を把握できる個体はない。器種・器形には壺、甕、鉢、高杯がある。

壺の外形は、胴部が大きく張り、最大径は胴部中位と高い(11・22)。頸部から口縁部に向けて緩やかに開き、口縁端部はわずかに受け口状につまみ上げられる(8・21・30)。紋様は口縁部から頸部・胴上部に集中し、櫛描波状紋・短線紋・横線紋、T字紋、篋描鋸歯紋・斜格子沈線などの紋様が描かれる。櫛描短線紋は紋様帯の最下段に付されるが、斜走の単段(29・73)、2段で横羽状構成(20・22)の2種が認められる。T字紋はすべて横線を1本で切るT字紋B1である。28のT字紋は縦沈線をきちんと横線の下端に合わせ、簾状紋風に仕上げている。80ではT字紋下に短線紋が付加されているのがわずかに窺える。28の胴部外面には赤彩が施されている。

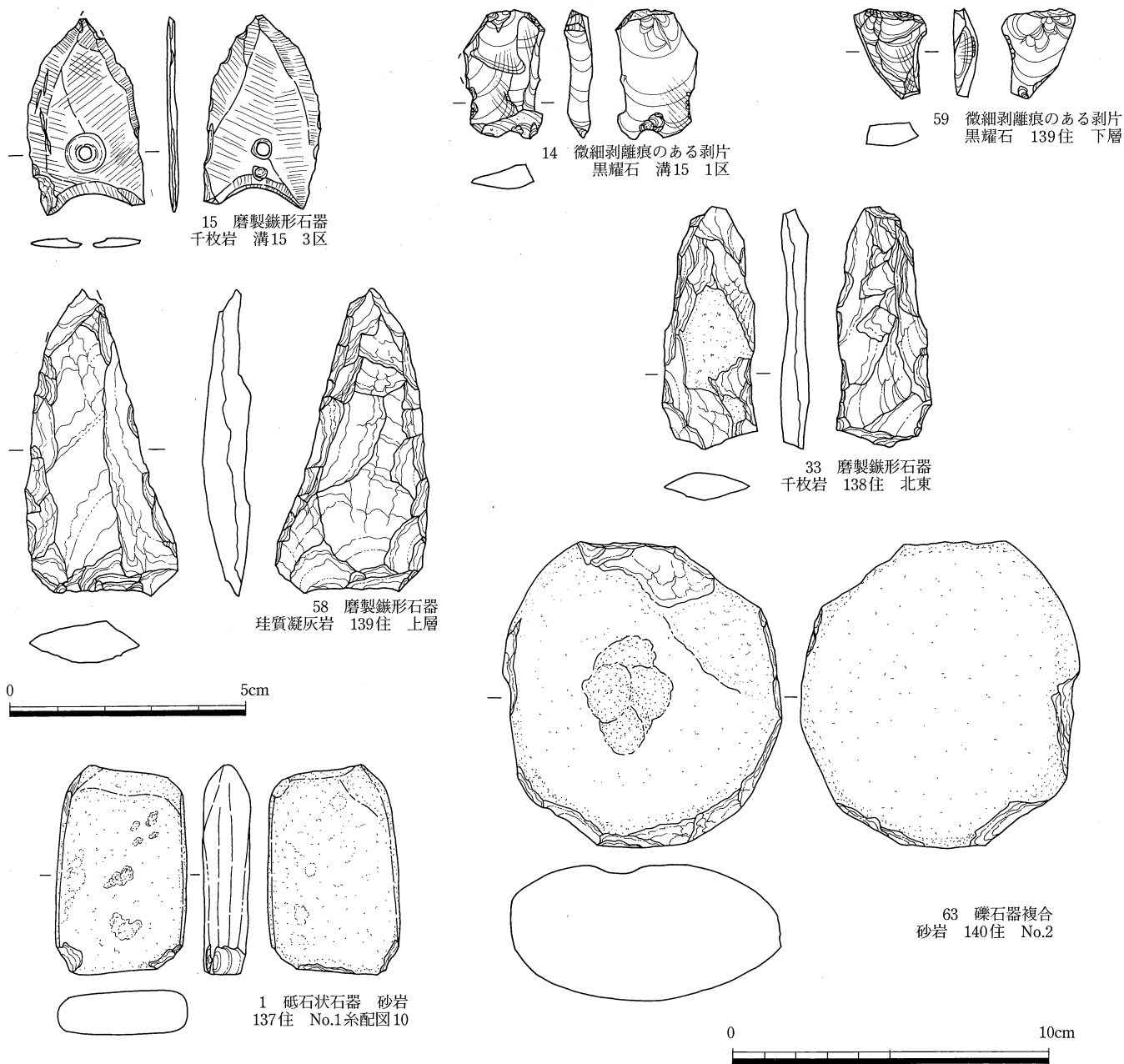
甕は、胴部の張りが弱いもの(3・5・14)と丸く張るもの(13)があり、いずれも頸部のくびれは緩やかになっている。紋様は櫛描波状紋を主体とし、斜走短線紋が少量伴う。頸部を画す櫛描簾状紋はほとんど見られず、わずかに拓影資料53に横線紋らしきものを認めるのみである。口縁端部の外面に波状紋が巡るものの中には、わずかに受け口状を呈す個体(5・14・46・62)がある。口唇部上面に刻みをもつものが散見され、施紋原体は櫛状工具が主体(13・37・77)だが、篋状工具によるものも1点(63)みられる。

鉢は1点(10)を認めるのみである。逆台形の形態で、口縁が若干つまみ上げとなっている。外面にわずかに縦方向のミガキが残るが赤彩はない。

高杯は3点を図示できたが、いずれも杯・脚接合部付近の破片である。12と23は外面に赤彩を有し、杯部、脚部ともに単純に外開する形態をとると推測される。これらに対し15は脚部が下方へ向ってややすぼまってから外反する形態を呈し、当地域では類例を見ない。

以上の弥生土器は、壺・甕などの紋様・形態からみると弥生時代後期初頭～前半に属すると推定する。

古墳時代の土器 1検の137住、溝13、検出面などから出土した。土師器と須恵器があり、器種・器形では土師器に杯・壺・甕・小形甕・高杯・甌、須恵器に蓋杯・高杯・甌が認められる。11点を図化提示できた(第8・9図1・2・24・26・27・31～36)。

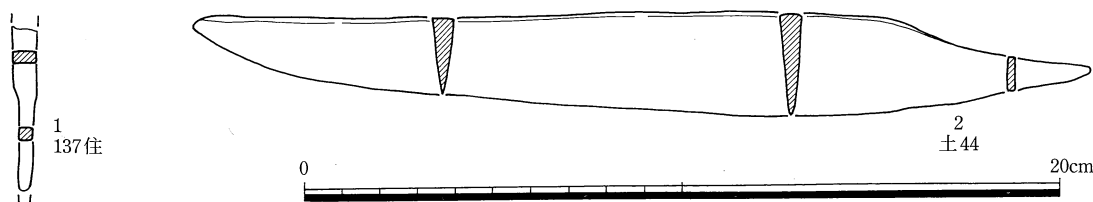


第11図 石器

第1表 実測図掲載石器属性一覧

最大長・最大幅・最大厚：mm，重量：g，剥離角：度

No.	出土遺構・地点	器種	石材	母岩	素技	二次加工	最大長	最大幅	最大厚	重量	剥離角	打面	末端	礫面
1	137住 No.1系配図10	砥石状石器	砂岩	単独	礫選択	研磨・敲打	67.0	42.3	13.4	68.5	-	-	-	ほぼ全面
14	溝15 1区	微細剥離痕のある剥片	黒耀岩	単独	通常	微細	27.6	17.2	5.5	2.1	114	礫面	ヒンヂ	背小
15	溝15 3区	磨製鎌形石器	千枚岩	単独	不明	研磨・穿孔	42.3	25.1	2.3	3.3	-	-	-	なし
33	138住 北東	磨製鎌形石器	千枚岩	単独	通常	通常・研磨	52.1	20.4	5.4	6.7	-	二次	二次	なし
58	139住 上層	磨製鎌形石器	珪質凝灰岩	単独	通常	通常・両極	66.7	27.0	9.5	18.6	125	複剥	二次	なし
59	139住 下層	微細剥離痕のある剥片	黒耀岩	単独	通常	微細	19.8	15.2	5.1	1.6	111	礫面	フェザ-	なし
63	140住 No.2	礫石器複合	砂岩	単独	礫選択	研磨・敲打	100.2	84.3	42.1	488	-	-	-	ほぼ全面



第12図 鉄器

土師器杯は体部に稜をもつもの(32)、もたないもの(31)の2形態がみられ、いずれも内面は黒色処理がなされる。甕は長胴形を呈すとみられるもの(2・33・34)が主体を占めるが、これらに全形を知り得るものはない。丸底で胴張りの36はミガキ調整をもたないが形態から壺に分類したい。27は高杯の脚柱部である。甗は図化提示できなかったが、把手部の破片が出土している。須恵器は35が蓋杯、26は高杯の杯部破片と推定でき、図化提示できなかったが甗の肩部破片も1点ある。

これらの土師器・須恵器の時期は27の土師器高杯を除き、いずれも古墳時代後期後半に属する。27の高杯脚部のみは古墳時代中期に属し、1検から出土している。

平安時代の土器・陶器 1検の東部およびその上の平安面から少量が出土した。土師器と灰釉陶器があるが、図化提示できたのは1点にすぎない(第9図25)。25は灰釉陶器の皿(または段皿)の口縁部破片である。いずれも平安時代後期に属する。

2 石器(第11図・第1～3表)

石器群の概要 1検の137住、溝13等の遺構(古墳時代後期、平安時代)と、2検の138～140住、溝17等の遺構及び包含層(いずれも弥生時代後期前半)より、自然礫を含めると総点数80点、総重量7782.26gを測る石器群が出土した。1検では137住から砥石状石器2点、溝13・15からは磨製鏃形石器等が出土している。2検では138・139住より磨製鏃形石器2点等が出土している。住居址は138住を除き、調査範囲が狭かったためか、各遺構単位石器群は質量ともに乏しく、多くの個体が全く同一母岩関係が認められない単独資料であった。しかし、いわゆる焼失住居である138住においては、被熱痕跡と考えられる赤化面が認められる礫片数点より構成される接合資料数例及び、同一母岩資料数例を確認しており、ある程度の一括性を認め得るものと考えられる。

出土遺構	F	RF	MF	PP	P	PT	PI	P II	P III	PC	Ws	計
137住			1			6					2	9
138住	10	3		1	6	17		1				38
139住			1	1	1	3						6
140住						1				1		2
竪穴状遺構1						1					1	2
溝13					2							2
溝15			1	1								2
溝17					1							1
第1検出面					1		1					2
第2検出面		1			1							2
包含層					1	1			1			3
東地区包含層					8							8
東地区グリット					2							2
東地区							1					1
計	10	4	3	3	23	29	2	1	1	1	3	80
出土遺構	F	RF	MF	PP	P	PT	PI	P II	P III	PC	Ws	計

F:剥片, RF:二次加工のある剥片, MF:微細刺痕のある剥片, PP:磨製鏃形石器, P:自然礫, PT:礫片, P I:礫石器Ⅰ類(凸面敲打), P II:礫石器Ⅱ類(凸面研磨), P III:礫石器Ⅲ類(凹面敲打), PC:礫石器複合(P I～P IIIの複合), Ws:砥石状石器(凹面研磨)

第2表 遺構単位石器組成

出土遺構	Ob	Ch	HSa	Sh	Ho	Sl	Tu	Sa	Qu	An	Ph	STu	計
137住					5	1		2		1			9
138住		4	3	12	2	2		8	1		6		38
139住	1			1	1	1		1				1	6
140住				1				1					2
竪穴状遺構1		1					1						2
溝13		1	1										2
溝15	1										1		2
溝17		1											1
第1検出面		1						1					2
検出面									1			1	2
包含層			1					2					3
東地区包含層							1	7					8
東地区グリット				1			1						2
東地区			1										1
計	2	8	7	14	8	4	3	22	2	1	7	2	80
出土遺構	Ob	Ch	HSa	Sh	Ho	Sl	Tu	Sa	Qu	An	Ph	STu	計

Ob:黒曜岩, Ch:チャート, HSa:硬砂岩, Sh:頁岩, Ho:ホルンフェルス, Sl:粘板岩, Tu:凝灰岩, Sa:砂岩, Qu:珪岩, An:安山岩, Ph:千枚岩, STu:珪質凝灰岩

第3表 遺構単位石材組成

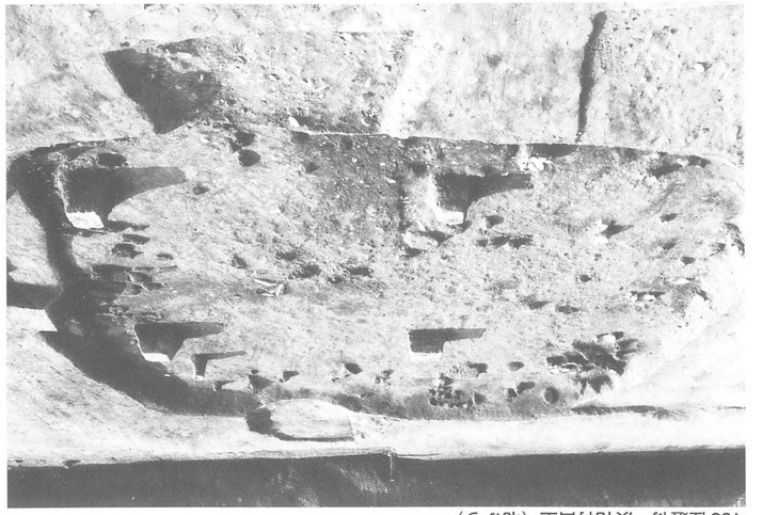
3 鉄器(第12図)

1検の137住(古墳後期)と土44(平安後期)から1点ずつ出土している。第12図1は137住出土品で長さ4.5cmを測る。上下を欠損しているが、鏃の一部と推定している。2は土44から出土した短刀である。全長23.8cm、刃渡り18.7cmを測る。目釘穴などはみあたらない。いずれも出土遺構の時期に属すると考える。

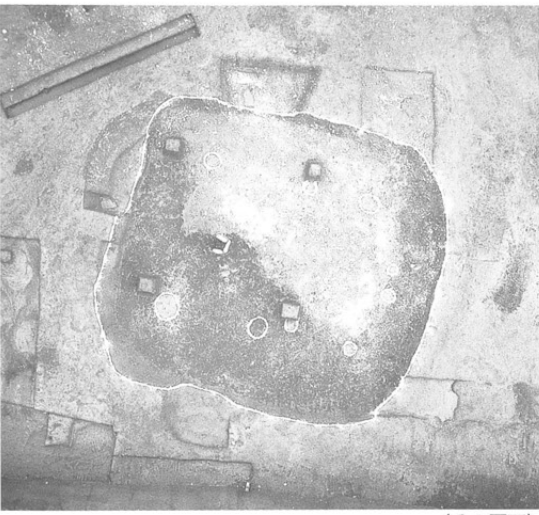
4 炭化材

2検の138住(弥生後期前半)から多量の炭化材が出土した。取り上げた109ブロックについての森義直氏による樹種鑑定ではコナラ103点、クリ1点、クルミ3点、スギ1点でコナラが圧倒的に多い(93.6%)。また、炭化材のうち1点をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して放射性炭素年代測定を行ったが、樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節、年代値は2,330±50という結果を得た。出土土器から導かれる住居址の推定年代より300～400年古くなるが、放射性炭素年代と暦年代の「ずれ」の範囲を考慮し、弥生後期前半という時期を概ね支持できるといえる。

これらの炭化材は基本的には建築材と考えられるが、コナラ種子の炭化物が1点混じって出土しており、その他の家財なども一緒に燃えている可能性がある。



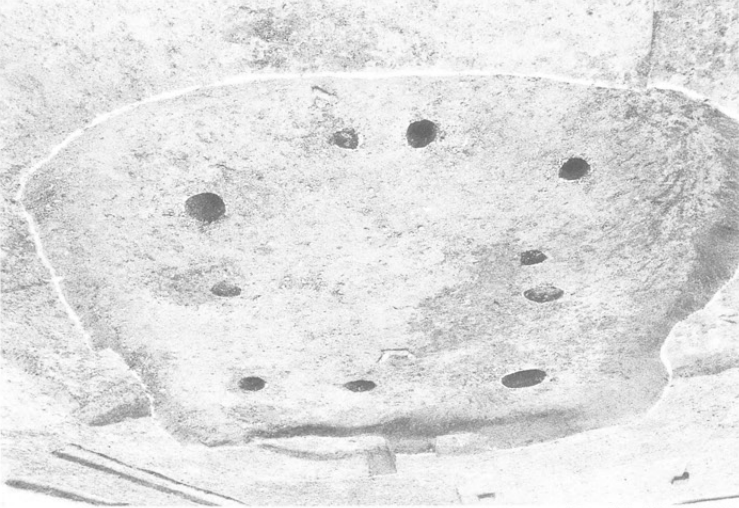
138住遺物・炭化材出土(北から)



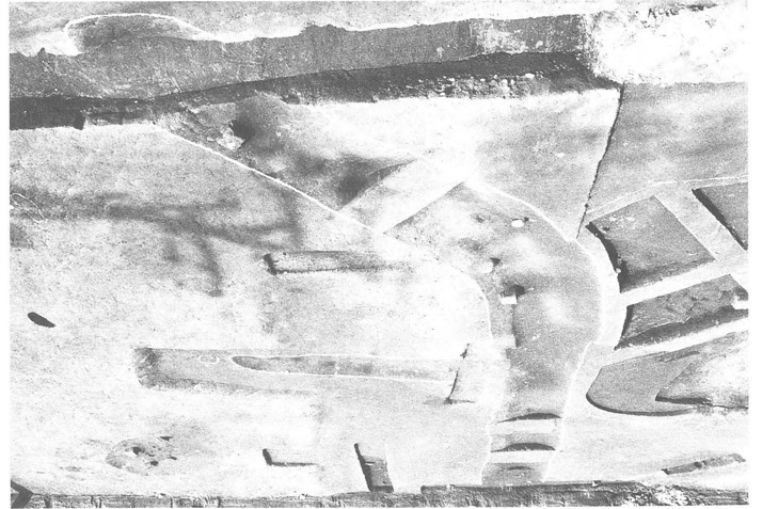
138住全景(上空から)



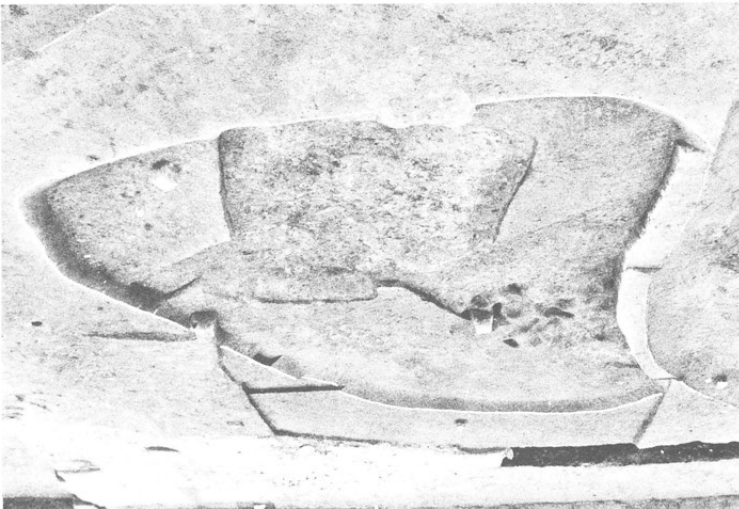
2棟全景(西から)



138住全景(東から)



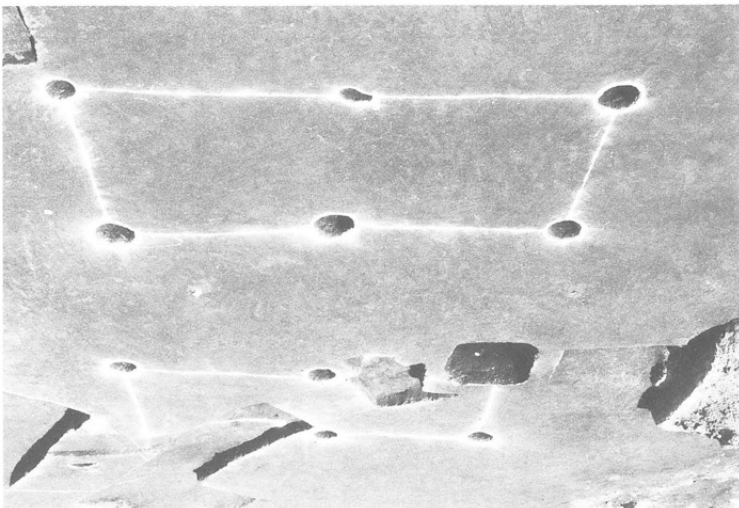
溝13・14(南から)



壁1(北から)

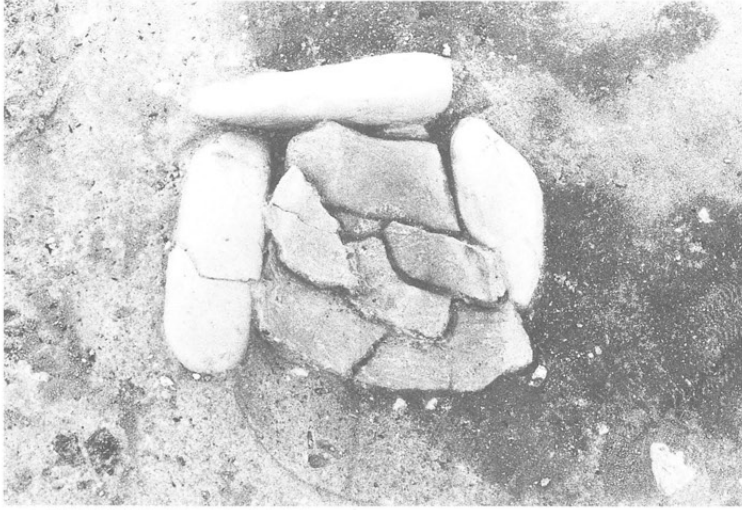


1棟全景(西から)



建22・24(南から)

138 住炉 (上か四: 奥壁側)



139 住全景 (南から)



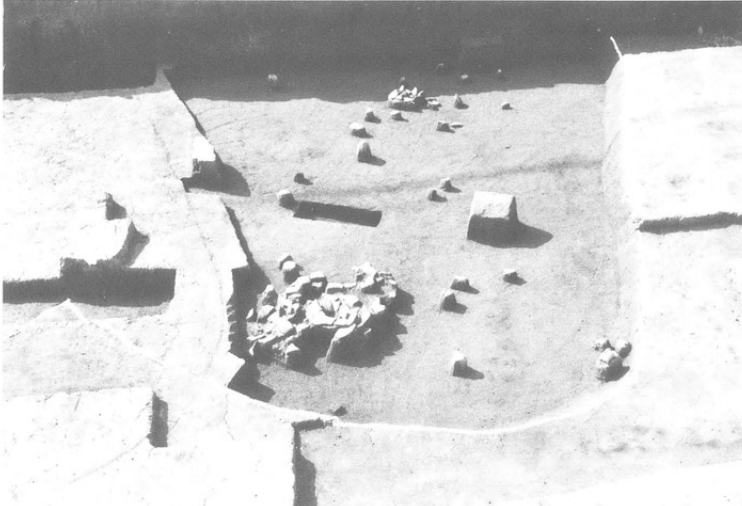
139 住土器埋設炉 (第8図: 南から)



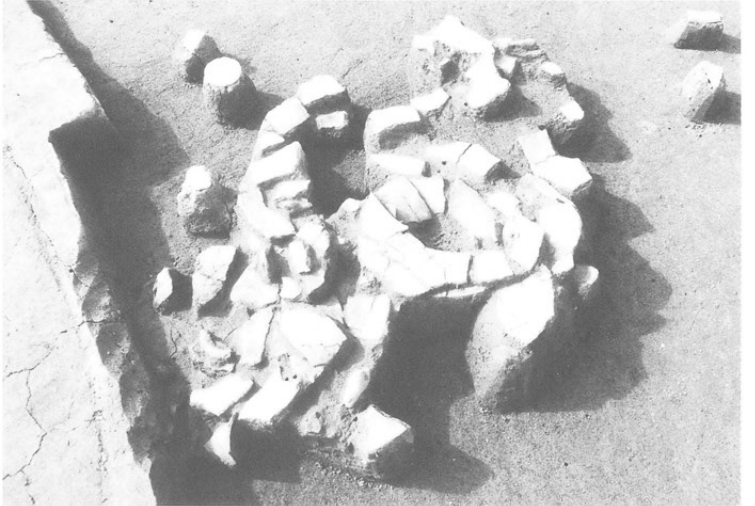
140 住全景 (西から)



140 住遺物出土 (北から)



140 住遺物出土 (第9図22ほか)



弥生土器 (第8図11)



弥生土器 (第9図22)



2 検航空写真



長野県松本市 出川南遺跡Ⅵ 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし いでがわみなみいせき6 きんきゅうはくつちようさほうこくしょ
書名	長野県松本市 出川南遺跡Ⅵ 緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.147
編著者名	直井雅尚、太田圭郁
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000(代) (記録・資料保管:松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)
発行年月日	2000(平成12)年3月24日 (平成11年度)

所収遺跡名	ふりがな所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南	ながのけんまつもとし 長野県松本市 いでがわまち 出川町18-1他	20202	177	36度 12分 16秒	137度 58分 21秒	19980716～ 19980930	1,486m ² (2面分)	民間マンション建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川南	集落跡	弥生後期 (後期前半)	竪穴住居址3軒(138～140住) 竪穴状遺構1棟(竪2) 溝(流路)1本(溝17) ビット数基 遺物包含層2か所		弥生土器、石器(磨製鎌、砥石、礫石器等)、炭化材		弥生時代後期前半と古墳時代後期、平安時代後期の集落址。弥生時代の竪穴住居址からは建築材とみられる炭化材が多量に出土。	
		古墳後期	竪穴住居址1軒(137住) 竪穴状遺構1棟(竪1) 土坑1基(土45) 溝5本(溝12～16) ビット12(P45・49～51・57～59・83～87)		土師器、須恵器、鉄器(鎌?)、石器(砥石)			
		平安後期	掘立柱建物址3棟(建22～24) 土坑2基(土44・46) ビット43(掘建掘方除く)		土師器、灰釉陶器、鉄器(短刀)、炭化材			



調査地を上空から望む(南から。線路はJR篠ノ井線と南松本駅)

松本市文化財調査報告 No.147
長野県松本市 出川南遺跡Ⅵ 緊急発掘調査報告書
 発行日 平成12年3月24日
 発行 松本市教育委員会 〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号
 印刷 株式会社総合印刷 〒390-0874 長野県松本市大手3丁目7番11号